

第04講 「品詞」の理解の関門「形容詞」

「品詞」の本当の理解は、「形容詞」の認識・理解と親しみからと、「副詞」の認識・理解と排除・疎外からはじまりますと言っても過言ではないでしょう
まず本講では、「形容詞」を認識・理解し、親しみを感ぜられるようになりましょう

はじめに、≪「形容詞」は、「名詞」の「状態・性質」を示す「品詞」である≫という大前提を認識・確認してください

ここで、「形容詞」の活躍する場は、Ⅰ「名詞修飾」と、Ⅱ「補役（主語修飾）」の2つあることを覚えてください（Ⅰ直接密着的な活躍か、Ⅱ『文。』中での間接説明補完的活躍かの違いを認識してください）

Ⅰ	名詞を修飾する 名詞修飾用法 (限定用法)	主に「名詞」の前に置かれて、①「名詞」の「状態・性質」（「名詞修飾」）を示し、②結果的に、「名詞」の範囲を限定することになる（「名修形」と略します）
Ⅱ	「補役」になる 補役用法 (叙述用法)	「自動詞」の後に置かれて、「主役」の「性質・状態」を「説明」する（「形容詞補役」で「形補」と略します）（『文。』の「構成要素」となっていることが重要）

「名詞修飾用法」の「形容詞」を「役外装飾族」と命名します（詳しくは後述）

Ⅰ 「名詞修飾用法」

I k n o w a c l e v e r b o y .
他動詞 **名修形** **中心名詞・中心目的語**

- ①「賢い」というのは、「少年」（名詞）の「状態・性質」を示しています
- ②「少年」が、「賢い」という「形容詞」によって、数多くいるだけの「少年」から、少数の「賢い少年」に「限定」されています

「限定」されるというのは、多数存在する「名詞」の中から、「形容詞」により、範囲が狭められ、話題になっている「名詞」が「少数化」「特定化に接近」することです

『文。』中での「名詞修飾形容詞」の行方・運命

ここで、重要なのは、「名詞修飾形容詞」の「運命」です

上記の例文では、『文。』の構成上、「b o y」が「目的語」で「構成要素」ですが、「c l e v e r」は『文。』の「構成要素」ではなく、「b o y」を「修飾」しつつ、構成上は「b o y」に「吸収」され「消滅」していくのです

そして、「構成要素」で「目的役」となっている「b o y」を「中心名詞」「中心目的語」と呼びます（「主役」の場合は「中心主語」で、「補役」の場合は「中心補語」です）（「中心名詞」は「中心主目補」の総称です）

このように、「名詞修飾形容詞」は「中心名詞」を修飾し、「中心名詞」に「吸収され・消滅する」運命にあり、「構成要素」とは無関係なのです

「名詞修飾形容詞」を「役外修飾族」と命名し分類することは後述します

「名語」と「名句」

a	h a n d s o m e	c l e v e r	b o y
名修形	名修形	名修形	名語（中心名詞）

これらは、4つの「単語」で構成されていますが、4つの「単語」を独立させて意味をとっても何の効果効用もありません

「4単語」で、ひとつの「意味のあるまとまり」としてとらえるのが通常です
そして、この「まとまり」を、「句」といいます（「名句」）

この「まとまり」が『文。』中にあったとすれば、真に「構成要素」として働くのは、「中心名詞」の「b o y」だけで、その他の3つの「単語（形容詞・形容語）」は、「衣装やアクセサリー」にすぎず、『文。』中では、構造上は「中心名詞」に「寄生」しているだけで、役割的には「中心名詞」に「吸収され消滅」してしまうのです
このような、「中心名詞」を核とし、様々な「（名修）形容詞」を伴った「意味のあるまとまり」を「名句」といいます（「定義」）

「b o y」は「1単語」なので「名語」ですが、「a b o y」は「名句」なのです
このように、《「複数の単語の意味のあるまとまり（集合体）」》を「句」といいます（ただの「群衆」とは異なる有機的集合体すなわち「社団」的なものを認識してください）（ここで・・・、「社団」・・・、わからない語は逐一きちんと辞書で調べるクセをつけてくださいよ）
他には、「形容句」と「副句」が重要です（第6講で学習します）

『文。』の「構成要素」の観点からのまとめ

I	名詞修飾用法	「中心名詞」を修飾し、吸収され、『文。』の「構成要素」ではなく、構造上は役に立っていない
II	補役用法	『文。』中で、「補役」という「構成要素」として、構造上、重要な働きをしている

「役外装飾族」（役者の衣装やアクセサリーのようなものです）

「名詞修飾形容詞」は、「文役・構成要素」ではなく「配役外」で、中心となる「名詞を装飾」するに過ぎない存在なので、本書では、「役外装飾族」と名付けます
「役者（中心名詞）」と「衣装・アクセサリー（名詞修飾形容詞）」の関係ですね

II 「補役用法」

① That boy is clever .
自 形容補語

もう、説明はいりませんね

「clever」が、『文。』中で、「形容詞補役」として、「重責」を果たしています

② Taro is a clever boy .
名修形 名修形 中心補語

名句で補役（名補句）

この例文では、文法的・構造的には、「タロー」が「少年」だ、という「中心補語」に重点がおかれた表現となっています（文脈的意味では、「賢い」ということが重要かもしれませんが・・・）

「clever」は「アクセサリー」に過ぎませんので、「clever」を取っても、「Taro is a boy .」で、「補完文型（名補文型）」であることに変わりはありません

しかし、①の『文。』で、「clever」を取ると、「Taro is .」となり、「タローは存在する」と、「自立文型」になってしまいます

取り去ると『文。』のかたちが変わってしまうような位置や働きにある「語句節」を「文役」や「構成要素」というのです

それにしても、「形容詞」という呼称はわかりにくいかもしれませんね
名前を示す「品詞」が「名詞」なら、「名詞」の「状態」を示す品詞は、本来「状態
詞」とでもいうべきでしょうか（実態的には「評価詞」ともいえます）

「彼は病気だ」「ヤツは馬鹿だ」という場合、「病気だ」「馬鹿だ」というのは、「状態・
性質」を示す「形容詞補役」なのが認識・理解できるようになりましたか

「名詞補役」と解すると、「職業・地位」や「モノ・コト」的に扱うことになり、「病
気」「馬鹿」という「モノ・コト」とまるで着ぐるみ扱いのようになってしまいますよ

次講では、「英文読解」の「邪魔者」である「副詞」についてみていきます

合言葉は、「邪魔者は排除する」です

でも、「場面状況」を設定する、縁の下や場外の重要な担当者・裏方なんですね

.....

本講の補足確認点

本講の段階では、「補役」に関しては、「主役」を説明する「主格補役」のみを考え、「目
的役」を説明する「目的格補役」については視野に入れておりません（第19講参照）